



俳句雑誌[おき]

6月号

沖 発行所

緑 雨

能村 研三

置酒歓語

小曾根真コンサートで大槌町の人に会う

夏 帽 の 吉 里 吉 里 人 を 励 ま せ り

こ の 春 の 緑 の 羽 根 は 弔 意 め く

同 義 語 に 「 水 棺 」 「 水 葬 」 五 月 闇

気 塞 ぎ の 世 を 晴 ら す な り 夏 立 て り

「置酒歓語」という言葉がある。辞書には「置酒高会」として「盛大な宴会」という意味で解説している。さて俳句の世界では「置酒歓語」というと、まず波郷の名が出てくる。ある意味で「鶴」の連衆意識を表す言葉で使われていた。また楠本憲吉にも「置酒歓語」という本が出版されている。波郷の流れをくんで藤田湘子も新宿のボルガなどで、俳人たちと俳句の話に口角泡を飛ばしたと言う。

さて先師の時代の「沖」では「置酒歓語」は余り馴染まなかったかもしれない。先師登四郎は、もともと酒が飲めなかったので句会の後はコーヒーを飲みながらの歓談であったが、話好きであったので弟子たちを囲いでの話は面白かった。また林翔先生はお酒は好きであられたが、静かにお飲みになるタイプの方であった。晩年の先師は句会の後の酒席にもよく付き合ってくれて、酒は飲まなくても歓語は盛んで、興に乗るとカラオケまで行くこともあった。

現在の「沖」では、本部句会の中央、東京、千葉の三つの句会では、担当

埋立ての土は馴染まず蚊帳吊草

躁鬱のはざま五月の乱費かな

合併の前の名辿り山法師

周波数合はぬ緑雨のカーラデオ

梅雨めきて糖衣錠とはもの足りぬ

巻藁に矢の的中す端午かな

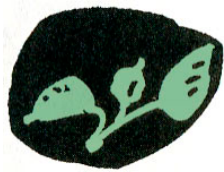
の幹事のお世話もあつて、句会の後の二次会には毎回数数名の方が参加してくれる。なるべく常連だけでなく、初めて句会に参加した人なども誘い、懇親を深めている。

俳句会での緊張から解き放たれて、しかもまだ句会の余韻が残っている時なので、気持が高揚しており、親しい仲間同士で句会についての熱い議論が出来るのもすばらしい。ある意味では本音が聞ける瞬間なのかも知れない。

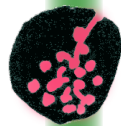
俳句会だけで帰ってしまう人もおられるが、何かもつたいないような気がする時もある。俳句は机上だけで勉強できるものでなく、やはり連衆の意識が高揚することも自分にプラスになることに思えるのだが。

これから中央の例会に限らず、地方の俳句大会でも、なるべく時間をとって多くの方々との「置酒歓語」していきたいと思っている。

能村 研三



蒼茫集



津 波

大畑 善 昭

雉子啼いて間もなくのこと巨き地震
貞観の津波平成の春津波
ぞつくりと土筆余震はまだつづく
行方不明者逃水の辺にゐるか
春星のびつしり津波引きし街
つくづくしこの地千年後も津波

太古の地層

酒 本 八 重

春灯を大事に抱へ一家族
被災地の闇を穿ちて桜咲く
朧夜を袱紗づつみにして置かむ
永き日の余震が余震こぼしけり
まだ意地の残る木の瘤ひこぼゆる
苜蓿此処は太古の地層なり

東日本大震災

北 川 英 子

さくらさくらその他は耳目覆ひたし
シーベルト・ベクレル春夜うなされて
瓦礫よりたんぼの黄津波跡
竜天に登りそこねし地震つづき
すべて嘘ならばとエイプリルフル
春愁など贅沢なにも失はず

古き佳き

宮内とし子

己が身の揺れは余震か蝌蚪ぐもり
地震あとの列を乱さぬ葱坊主
初蝶の先へ先へとゆく日向
道一本入れば花充つ文士村
鉛筆は文士の遺品春惜しむ
古き佳き装幀挿画見る暮春

立泳ぎ

久染康子

漣下り落花吹雪に吞まれけり
逃げてゆくゴム風船の立泳ぎ
若き師も見し花と決め仰ぎけり
春昼や赤紙太りの仁王燃ゆ
さつきから人待ち顔の春日傘
話すうち同窓と知る蓬摘

田端

辻美奈子

少年の師が凭れゐる春櫓
又の名を子規享年三十□^{しかく}春
夕ごろこあり春愁の坂くだり
花散らす風きて龍之介はお留守
上向いて歩けと公孫樹芽吹きけり
黒々と水脈ありさくら大樹かな

パンダの檻

千田百里

彼岸七曜地震情報におろおろと
辛夷月夜や罹災地へ思ひ馳せ

並走の電車寄り来る目借時
駘蕩やパンダの檻にパンダゐて
花の昼お車移動願ひます
春惜しむ『青踏』に身を乗り出して

蟄居

秋葉雅治

土くれを碎けば日の香水温む
地震のあと蟄居旬余の路のたう
踏青や杖曳く土の余震なほ
ロマン田端文士村二句紡ぐ文士旧居の露地ざくら
芥川以後春愁のとめどなし

田端文士村

安居正浩

花曇り文士つてやつの情死自死
春かなし子規碑に「享年三十□」
師の小学校とや桜濃かりけり
卒業写真前列右から三人目
朝寝してまだ白黒のつけられぬ
卒業生拳合はせて別れけり

恩の幾百

荒井千佐代

ときに梢はげしく揺るる雛かな
いただきし恩の幾百うばらの芽
春宵のチエロはをみなの間
菜の花も潮も照りて鬱なりし
文弱胃弱花どきのココアかな
生涯を鳩は灰色春の風

地震酔ひ

吉田政江

葱坊主揺れてゐるかに地震酔ひ
春寒し余震百より覚えざり
被災地の心ひとつになる桜
復興の芯に一樹の老桜
行く春の卓に並べて水ボトル
駘蕩や波山陶器の扇形

花の坂

藤原照子

余震また余震一氣に花こぶし
蛇穴を出づや瓦礫に立往生

身の内に棲みつく余震さくら狩
文士村ひとりとは先師あたたかし
面影の先師下りくる花の坂
子規墓所にまみえて春を惜しみけり

黒い波

松井志津子

旭市飯岡二句

波引きし瓦礫の街の海市めく
黒い波寄せし水位や蔦芽吹く
停電や燭に暈ある木の芽和
余震なほいつしかさくら薬降らす
余震にも馴れて蔵のあくを抜く
遠眼鏡 百円分の春の海

鶏向き向きに

千田

敬

崖氷柱千尋超えたる殺気かな
折れざくら地震の地に咲く季の恵み
蠟燭の炎にさくら餅わらひをり
春惜しむ若冲の鶏向き向きに
文士村知らぬ月日のかぎろへり
陽炎にいざなはれ師の旧居跡

鎮魂の日 楠原幹子

3・11 鎮魂の日のまた増ゆる

仙台在住

春ならひ電池缶詰子に送り
白木蓮のおろおろ寂びてしまひけり
目に見えぬものに怯ゆる忘れ霜
日本がそれでもよくて残る鴨
大丈夫大丈夫よと桃の花

料 峭 鈴木良戈

卒業子トランペットを高く吹く
料峭の激震後の大夕日
昨日よりしかとふくらむ牡丹の芽
大時計止まりしままに春の地震
番号で呼ばる春寒患者椅子
点滴の雫もどかし春の夜

余 震 上谷昌憲

春みぞれ囚徒のごとく電車待つ
隠れ家によき春宵の地下の酒肆

揚雲雀神は何処にも在しませぬ
静脈に針がちかづくおぼろかな
芽吹く園銅像はまだ考へてゐる
また余震またまた余震花吹雪く

出羽の国 河口仁志

復興のいまさくらどき出羽の国
薄氷を割つて水汲む被災の子
避難所の校舎にひびく卒業歌
「がんばれ」の一語が重し初ざくら
継ぐ子なき老の一念春田打
なにごとともなかつたやうな春の海

花の奥 洲上千津

茎立の紫・黄花靡かざり
さくら東風亀甲割の田に荒ぶ
日々余震万朶の花の奥畏る
人を呑む風評の渦春疾風
疼くものあり花筏吹きたまる
金盞花むかしは櫻・割烹着

潮鳴集



蛸蚪の紐

石川 笙児

新葉のいつか出るはず蛸蚪の紐
花の雲ゆるき起伏の文士村
田端とふ先師の生地あたたかし
蠟燭の夕餉また良し花菜漬
停電の街をあらはに春の月

津 波

岡 部 玄 治

しみ返る津波の退きし地を踏むと
余寒なほ崖めく壁の津波線
海へ散る津波のあとの崖椿
芽吹急津波駆けのぼりし山も
余震あり桜湯すこし飲みあます

オールドボーイ

福 島

茂

木の橋の朽ちてゐるなり蛸蚪の国
ミモザ咲く申請中のパスポート
明日よりはオールドボーイ弥生尽
凹んでは直す球形紙風船
嘘泣きはうその始まり葱坊主

告 天 子

井 原 美 鳥

炉心溶融父よ母よと告天子
緊急地震速報薦の芽が真つ赤
指で追ふ地名ひとの名春寒し
余震なほおびただしきは杉菜の芽
蕪村その出自のくだりかぎろへる

沖作品



千葉

清水佑実子

市川

佐々木群

長崎

岩永充三

固唾のむ取材映像冴返る
春暁や帰宅難民てふ縁
忘れませんこの三月も人の輪も
与ふるも奪ふも神ぞ木の芽吹く
鎮魂の花よこぶしは北上す
ゆれ動く首都の稜線冴返る
らふそくを点け一椀の蜆汁
風光る夢小走りのランドセル
町ひとつ消え去るや春暁の浜
国憂ふ談義果てなし夜半の春
春の雪真珠の海に残る秘話
初花は天使の笑まひ慈悲の色
芹を摘むもう片方の手が淋し
おぼろの夜今宵も錠は掛けずおく
島九十九ゆるく抱へて春の虹

能村研三選

東京

五十嵐章子

能美昌二郎

山梨

長岡千波

永き日や出口違へて知らぬ町
花満開宝くじ売りバスも来て
ジャグジーへからだ委ねておぼろなり
切通し電車行き交ふ花の土手
春の雪だれかへメールしたくなり
三代の男ばかりの小正月
天気図に渦巻二つ寒波来る
左義長の芯は青竹爆裂す
草萌の畦に置かれし鋤二丁
薄氷の下にかすかな流れあり
乾電池のプラスマイナス地虫出づ
老人の乗合通院あたたかし
啓蟄や地下壕といふ文化財
藍甕の藍の息づき風光る
春疾風甲斐の棒道いくさ道

沖作品 15句選評

*

能村研三

鎮魂の花よこぶしは北上す 清水佑実子

今年、関東地方は辛夷がお彼岸の頃に咲いた。大震災から間もなくで、辛夷の花は美しく、限らない癒しを与えてくれた。辛夷というと「北国の春」の歌を思い出し、東北に思いを寄せるが、今年の辛夷の花は震災で亡くなられた人への鎮魂花でもあった。花前線によって青い空に白い花辛夷、その清々しい美しさは希望の花としてやがて被災地にも訪れることだろう。

ゆれ動く首都の稜線 返る 佐々木 群

この句も、大震災に遭った首都東京を詠んだものか。よくテレビを見てみると、地震や余震が起るとテレビ局の屋上に据えられたカメラから、街の様子が映し出され、ビルが揺れている様を生々しく報道されるが、これらの都会のビル群を作者は「首都の稜線」と表現した。

おぼろの夜今宵も錠は掛けずおく 岩永 充三

中々意味深長な句である。こうした句は古くは万葉集にも相聞歌として詠まれていた。たとえば、「人の見て言とがめせぬ夢に我今夜至らむやど閉すなゆめ」訳すると「人にとやかく言われない夢で逢おうね。今夜行くからね。くれぐれも扉に鍵は掛けないでおくれね。」ということになる。門や戸口などが、現実を訪ねて行つた時に閉まつていて、中に入れてもらえないというのは、哀しい。

永き日や出口違へて知らぬ町 五十嵐章子

日常の都会諷詠である。だれもが一度は経験したことがあるような事で、特に都心の地下鉄などは、いくつも地上出口があり、それを違えてしまつたりすると、方向感覚すらも失つて途方に暮れてしまう。何か見知らぬ町に降り立った不安と期待が交錯してきた。

三代の男ばかりの小正月 能美昌二郎

小正月は女正月ともよばれ、本当の正月が一段落した一月十五日に行われる。正月は普通であると女性家事や来客の接待などで忙しかつたのを慰労する意味で設けられたようだが、地域によってはこの女性たちをいつもとは反対に男性たちがもてなすところもあるようだ。この句、三代に渡る気が利かない男どもが顔をそろえてしまったところが面白く詠まれている。(以下略)